P-043

抗コリン剤に起因した口内乾燥に対するニザチジンの有用性

市立秋田総合病院

○松尾（まつお） 重樹（しげき）、阿部 明彦、鈴木 直子、
冨樫 寿文、石田 俊哉、佐々木 秀平

[目的] 最近、過活動膀胱（OAB）が注目を浴びるようになり、多種の抗コリン剤による治療が行われるようになった。しかし、その有害事象である口内乾燥により治療が中断されることも少なくない。そこで唾液分泌促進作用を有するニザチジン（アシノン）を用いて口内乾燥の改善効果を検討したので報告する。
[対象および方法] OAB治療において各種抗コリン剤（バップフォー、ベシケア、デトルシトール、ステーブラ）投与中に強く口内乾燥を訴えたOAB 30例（平均71.5才）に対しニザチジン150mgを1日2回朝夕2回8週間併用投与し、投与前、4週後、8週後に効果判定基準として唾液分泌の定量テストであるサクソンテスト（変法）そして自覚症状として長寿科学総合研究事業で用いられた問診を施行した。そして当科独自の判定基準によりニザチジンの総合効果判定を行った。
[結果] サクソンテストでは全30例の投与前の平均2.0gから、4週後平均2.8 g、8週後平均3.1 gと増量しともに有意な改善を認めた。ベシケア群（16例）でも投与前平均1.8gから、4週後平均2.6 g、8週後平均2.9 gと同様に有意な改善を認めた。しかし他群は検定不可能であった。アンケート調査では全30例の投与前平均8.4点から、4週後平均7.2点、8週後平均6.8点と漸減しいずれも有意な改善を認めた。しかし群別には有意差はみとめなかった。その結果サクソンテストでは有効率70%、アンケート調査では有効率56.7%、そして全30例の総合効果判定では著効1例、有効10例、やや有効6例、無効13例となり有効率56.7%であった。
[考察] ニザチジンはバップフォーに起因した口内乾燥に有効であることが既に報告されているが、近年発売された各種抗コリン剤に起因した口内乾燥にも約6割の症例で改善を示すことが判明し、その有用性が実証された。

P-044

OAB患者における抗コリン薬による口内乾燥感に関する比較検討

[1]しお医院、[2]つかだ医院

○影山（かげやま） 慎二（しんじ）[1]、塚田 隆[2]、塩 暢夫[1]

【目的】抗コリン薬は過活動膀胱（OAB）治療の第一選択薬であるが、その副作用である口内乾燥により投与の継続率や治療満足度は低下することが知られている。今回OAB患者において、イミダフェナシン（Imi）、コハク酸ソリフェナシン（Sol）、酒石酸トルテロジン（Tol）と従来からある塩酸プロピベリン（Pro）服用によるOAB改善度、口内乾燥感の程度および薬剤満足度に関する比較・検討を行った。
【方法】OABガイドラインに準じてOABと診断した患者を対象に調査を行った。口内乾燥感については牛島らのVisual Analog Scale（VAS）法を用いて、ドライマウスの自覚症状問診票を参考として、口の渇き、水分摂取量、話しづらさの3項目を調査した。さらに同じVAS法を用いて薬剤満足度を調査した。
【結果】対象患者はそれぞれImi：32例、Sol：25例、Tol：28例、Pro：24例であった。そのうち評価可能であった症例において、いずれの薬剤も4週後からOAB症状を有意に改善し、薬剤間で差は認められなかった。口内乾燥スコアの推移は開始時／4週後／8週後で、Imi: 70.4→90.1→75.4、Sol: 68.9→105.1→88.7、Tol: 85.8→101.0→98.7、Pro: 85.9→102.4→105.3であった。合計スコアの変化量は、投与8週後においてImi／Sol／Tol／Proでそれぞれ9.3／33.3／20.2／29.6であった。薬剤満足度については各薬剤で同等の満足度が得られた。なお、いずれの薬剤においても重篤な副作用は認められなかった。
【考察】今回検討した4薬剤ともにOAB症状の改善度や薬剤満足度に大きな差はなかったが、服用後の口内乾燥感の変動や推移についてはImiが全般的に低値であった。また、OAB患者は一般的に高齢であるため、様々な合併症や併用薬のため、投与前から口内乾燥をある程度有していた。それらを考慮すると、小数例の検討ではあるが、Imiは口内乾燥感の程度／変動が少なく、比較的使いやすい薬剤であると思われた。